

ライトノベルにおける物語の技法 (三)

——悪役令嬢の多様性——

高瀬 真理子

抄録

ライトノベルにおける文学作品の大衆化の中で、コロナ禍に見舞われる中、巣ごもり需要による電子書籍の伸びとその中で登場してきた「悪役令嬢もの」と呼ばれる作品群が、関連する「婚約破棄」「転生もの」「乙女ゲーム」「溺愛もの」と言えるような作品群と相俟って、驚くほどに出版された。また、イラスト、コミカライズ、アニメ化、ドラマ化、さらには映画化にまで発展するだけの力のある作品も増加している。現代の世界や社会が抱える課題からの影響が、西洋風な世界観の設定の中でどのように描かれているか、また、古来からある物語の技法、「継子いじめ」「友人間のいじめ」や「親からのネグレクト」あるいは秩序の混乱や常識の相違、物語やゲーム世界と現実の差異などから作者がテーマとしているものが、読者に訴えかけるもの、あるいは受け入れられているものはなんなのか、悪役令嬢の多様性について考察していく。

キーワード

悪役令嬢、聖女、高位貴族、王族、下位貴族、婚約破棄、国外追放、毒殺、感染症、転生者、反逆者、シナリオ補正（現実とゲームや小説との差異）、イベント、シンデレラストーリー、キャラク

ター設定、恋愛至上主義、戦争と交渉、魔法・魔石やそれに類するもの

一、はじめに

「ライトノベルにおける物語の技法（一）」^{註1}（二〇二一年三月）では、コロナ禍での電子出版の活況と作品の大衆化の状況を述べた上で、悪役令嬢というテンプレートについて述べた。つまり、おのれの権威を笠に着てヒロインをいじめ、最後にヒロインに心移したヒーローに断罪されるという型（フォーム）をどのように踏襲するか、あるいは、どのように意表を突くのか工夫することでライトノベルとしての物語のバリエーションを広げてきた。悪役令嬢とは、基本的に婚約者を奪おうとする者に挑まれる存在である。「ライトノベルにおける物語の技法（二）」^{註2}（二〇二三年三月）では、爆発的に増えてきたこの手の作品に「聖女もの」と呼べるものがあり、下級貴族子女の下剋上だけでなく、聖女という特別な力を有する実力派にヒーローの婚約者の立場を奪われるという作品が出てきた。転生者が、当然のように存在し、その前世は、日本人で三十歳前後の将来の見えない女性である場合が多く、これらの世代の不安や夢に寄与している面や、難しい感染症や国同士の関係性など現代社会

の抱える問題などが作品の重要な要素になっている作品も登場した。もはや、ライトノベルは、恋愛を主として扱いはがらも、国や社会の有り様を提示するようになった。そういう意味で、悪役令嬢ものは、貴族社会の権威主義で頭の硬い令嬢のそれが故に罰せられたり、破滅していくような物語ではないものが増加してきている。

本稿では、これらの悪役令嬢ものの多様性と向き合い、現在進行形で続々と新刊や続巻が出版されている現状の中から、二〇二三年を中心に二〇二四年初めまでの段階で、どのように進化したか、事例を拾って論じていきたい。作品選定の基準は、レビュー[※]上位[※]の物語として一定の品性のある作品を表にまとめた。(次頁参照)

二、一覧表からの概観

次頁表内の20「弱気MAX令嬢なのに、辣腕婚約者様の賭けに乗ってしまった」では、ピアは、地質学の大学院生が恋人に騙され、コンビニで殺されて転生しており、「ライトノベルにおける物語の技法(二)」で詳述しているが、地質学の知見を転生先で活かすところに、一般的な貴族令嬢の概念からはそれた個性派であるということが出来る。また、幼少期のピアの言葉を信じ、見守りながら育んだ、ルーファスをはじめとするスタン家の人々も、上位貴族で宰相を任されているも、そこにあぐらをかく人々ではないことが分かる。どちらかと言えば、アメリカを筆頭にピアやエリン、アンジェラやシェリー先生は、ヒロインによって悪役令嬢とされながらも、悪女とは言えず、そういう意味では、王妃が虚飾とエゴに満ちた悪代表として描かれている。息子の王太子を危険にさらし、ルーファスのような次期宰相に適任の若者をピアとの夫婦仲を裂いて国外に出そうとするに至り、夫である国王から離島観光に誘い出

される形で幽閉される。ゲームと現実の差を歴然と描いて、恋愛至上のゲーム世界を否定する。

25「私が聖女? いいえ、悪役令嬢です!」生存ルート目指した
らなぜか聖女になってしまっそうな件」も悪役令嬢が破滅を避けて現実的に生存できるように善行を積んでいくと聖女のようになるという物語で、19「異世界から聖女が来るようなので、邪魔者は消えようと思います」のフェリシアも、聖女がシャンゼルの王太子ウィリアムと結ばれるのであれば、平民になって、薬師として暮らそうと画策するが、ウィリアムの方は、幼少期にフェリシアに会って彼女に心を定めているという違いが、ゲームのシナリオにはない「現実」として存在していた。そういう記憶のないフェリシアは、平民を目指して行動するが、日本から召喚された聖女サラと仲良くなり、サラが恋する人がウィリアムとは別人であると知るとそこから瘴気を巡って助け合うようになり、どちらも聖女のような資質を見せ、瘴気の親玉アルフィアスを退治していく。拙稿でも述べたように、瘴気とは、人間の持つ負のオーラの集合体のようなもので、それが人化したものがアルフィアスという設定は、人間の本质をエネルギー体として捉え、よりよい社会や世界を作り出すには、前向きでまっすぐなオーラが必要だと説いているようにも読める。しかし、フェリシアが、姉に毒を盛られたきっかけから、薬師を志して精進する姿は、特殊な出生の事情があるとは言え、やはり王女としては異質である。

このように聖女のような悪役令嬢とか、専門職の知見を持つ貴族令嬢だったり王女だったりする事例が多く見られる。このようにライトノベルの世界での悪役令嬢は、物語世界のファンタジーでありながら、まっとうに生き抜くための現代性を有し、多様化が進んで

作品名	作者名	発売日 A	発売日 B	文庫名	巻数	備考
1 アルバート家の令嬢は没落をご所望です	さき	2015.04.	2020.12.	角川ビーンズ文庫	8巻	C
2 悪役令嬢、時々本気、のち聖女。	もり	2015.07.	2016.07.	PASH！ブックス	3巻	C
3 公爵令嬢の嗜み	澪亜	2015.11.	2018.12.	カドカワ Books	8巻	C スピノフ 内包
4 転生したけど王子は諦めようと思う	鬼頭香月	2016.01.		アイリス NEO	1巻	
5 虫かぶり姫	由唯	2016.07.	2022.10.	アイリス NEO	7巻	C・A
6 悪役令嬢は隣国の王太子に溺愛される	ぶにちゃん	2016.11.	2023.11.	ビーズログ文庫	14巻	C
7 悪役令嬢なのでラスボスを倒してみました	永瀬さらさ	2017.09.	2022.12.	角川ビーンズ文庫	11巻	C
8 自称悪役令嬢な婚約者の観察記録	しき	2017.04.	2017.08.	レジーナブックス	2巻	C
9 悪役令嬢レベル99～私は裏ボスですが魔王ではありません～	七夕さとり	2019.05.	2024.01.	カドカワ Books	6巻	C
10 悪役令嬢になんかなりません。私は『普通』の公爵令嬢です！	明	2019.09.	2023.01.	カドカワ Books	11巻	C
11 婚約破棄のために淑女になる方法	もり	2019.11.		PASH！ブックス	1巻	2のスピ ノフ
12 悪役令嬢、プラコンにジョブチェンジします	浜千鳥	2019.11.	2022.09.	角川ビーンズ文庫	6巻	
13 悪役令嬢の結婚後 もふもふ好き令嬢は平穩に暮らしたい	青蔵千草	2019.12.		レジーナブックス	1巻	
14 転生悪役令嬢は推しのハビエンを所望す！	藍上イオタ	2019.12.		アイリス NEO	1巻	
15 悪役令嬢の怠惰な溜め息	篠原皐月	2019.12.	2020.12.	電撃の新文芸	3巻	C
16 メイデーア転生物語 この世界で一番悪い魔女	友麻碧	2020.03.	2023.05.	富士見L文庫	6巻	C
17 やり直し令嬢は竜帝陛下を攻略中	永瀬さらさ	2020.03.	2022.09.	角川ビーンズ文庫	5巻	C
18 僕は婚約破棄なんてしませんからね	ジュピタースタジオ	2020.04.	2021.09.	一迅社ノベルス	3巻	C
19 異世界から聖女が来るようなので、邪魔者は消えようと思います	蓮水 涼	2020.07.	2022.09.	角川ビーンズ文庫	5巻	C
20 弱気MAX令嬢なのに、辣腕婚約者様の賭けに乗ってしまった	小田ヒロ	2020.08.	2022.12.	ビーズログ文庫	5巻	C
21 悪役令嬢は二度目の人生を従者に捧げたい	紅城蒼	2020.09.		ビーズログ文庫	1巻	
22 悪役令嬢のおかあさま	ミズメ	2020.10.		レジーナブックス	1巻	
23 悪役令嬢は断罪引退を目指したい！ けど、もしかしてここ溺愛ルート！？	せらひなこ	2020.09.		ティアラ文庫	1巻	
24 悪役令嬢は今日も華麗に暗躍する 追放後も推しのために悪党として支援します！	道草家守	2020.11.	2021.05.	カドカワ Books	2巻	
25 私が聖女？いいえ、悪役令嬢です！～生存ルート目指したらなぜか聖女になってしまいそうな件～	藍上イオタ	2020.11.	2021.05.	ベリーズファンタジー	2巻	
26 悪役令嬢は『萌え』を浴びるほど摂取したい！	烏丸紫明	2020.12.	2021.09.	ビーズログ文庫	2巻	
27 ベタ惚れの婚約者が悪役令嬢にされそうなので、ヒロイン側にはそれ相応の報いを受けてもらう	杓子ねこ	2020.12.	2022.05.	マックガーデンノベルス	3巻	C
28 悪役令嬢は推しが尊すぎて今日も幸せ	ぶにちゃん	2021.01.	2022.03.	ビーズログ文庫	2巻	6のスピ ノフ
29 悪役令嬢だそうですが、攻略対象その5以外は興味ありません	千 遊雲	2021.01.	2022.11.	レジーナブックス	2巻	C
30 悪役令嬢は溺愛ルートに入りました！?	十夜	2021.02.	2023.09.	デジタル版SQEXノベル	6巻	C
31 悪役令嬢はナイチンゲールをめざす	山田すずか	2021.05.	2022.02.	ビーズログ文庫	2巻	C
32 転成したら悪役令嬢だったので引きニートになります	藤森フクロウ	2021.05.	2024.03.	アイリス NEO	5巻	C
33 自称悪役令嬢な妻の観察記録	しき	2022.04.	2023.04.	レジーナブックス	3巻	C 8の続編
34 モブ令嬢テサシア・ノーザランは理想の恋を追い求めない。	ただのぎょー	2022.08.		アース・スター ルナ	1巻	
35 モブ同然の悪役令嬢は男装して攻略対象の座を狙う	岡崎まさむね	2022.09.	2024.01.	TOブックス	4巻	C
36 破局予定の悪女のはずが、冷徹公爵様が別れてくれません！	琴子	2022.11.	2023.05.	ビーズログ文庫	2巻	C
37 私の上に浮かぶ『悪役令嬢(破滅する)』って何でしょうか？	ひとまる	2022.12.	2024.01.	ビーズログ文庫	2巻	C
38 どうも、噂の悪女でございます 聖女の力は差し上げるので、私はお暇頂戴します	三沢ケイ	2023.02.	2023.11.	ベリーズファンタジー	2巻	C
39 公爵令嬢は我が道を場当たり的に行く	ぼよ子	2023.04.	2023.07.	アリアンローズ	2巻	
40 追放された公爵令嬢、ヴィルヘルミーナが幸せになるまで。	ただのぎょー	2023.06.	2023.06.	アース・スター ルナ	2巻	
41 契約婚した相手が鬼宰相でしたが、この度宰相室専任補佐官に任命された地味文官(変装中)は私です。	月白セブン	2023.11.		角川ビーンズ文庫	1巻	
42 悪役令嬢たちは揺るがない	八月 八	2023.11.		KADOKAWA	1巻	

Cはコミカライズ有。Aはアニメ化

発売日Bは最新刊

いると考えられる。今回採り上げるものの中には、男装して女性の人気をさらう悪役令嬢もおり、実は、オネエタイプのヒーローも出始めていて、現代のLGBTQ問題を受け入れようとしているものもある。また、本来、悪役令嬢たるものあくまでも「役」であって、厳しいことも言える常識人なのだという描き方もある。こういう特徴的な悪役令嬢像を抽出してみたい。

三、悪役令嬢は溺愛ルートに入りました!?

ダイアンサス侯爵家(撫子)

サファイア

ルチアーナ(悪役令嬢)

コンラート

フリテイリア筆頭公爵家(先見の家系・黒百合)

ラカーシュ(鉄面皮の美形)

セリア嬢

ウイステリア公爵家(魅了の家系・藤)

ジョシユア魔術師団長

オーバン図書副館長

ルイス

ダリル

ハイランダー王家(百合)

王太子エルネスト

隣国ニンファー王家

第二王子カール

ピオラ辺境伯家

ユーリア嬢

ユクドラシル
世界樹と四星(東星・北星・西星・南星)

○印は元シナリオでは死すべき運命を持つもの

転生令嬢のルチアーナは、ある日自分が「魔術王国のシンデレラ」というゲームの中の「断罪される悪役令嬢」であることに気づき、ヒロインの邪魔をせず、無事にダイアンサス侯爵家を守り、自分も生き抜くことを心に誓う。また前世では平凡な日本人で、母親から「女性の幸せは、結婚してこそだからね。素敵な旦那様を捕まえて、庭付き一戸建てで暮らすのが一番よ」と言われながら育ち、そのことに反発していた日本女性であることを思い出す。そこでルチアーナは前世の知恵や技術を使って生き延びるべく、破滅しないための対策を練りはじめる。基本的には、攻略対象と思われる王子以下の高位貴族男性に近づかなければいいわけだが、リリウム学園は王立なため、通わないという選択肢はない。そこで、学校に通いながら対策を練ることにする。

根が不真面目な設定であるルチアーナの後を受けて、学校に行くとさまざまな反応が返ってくる。自分というものに目覚めた新生ルチアーナは、自分が「傲慢なお嬢様だけでなく気も多い」ことにも気づき、破滅を回避するために頭を抱えてしまう。また、王太子に執着して呆れられていたらしいことにも気がつき始める。

しかし、ルチアーナは「歩く彫像」と呼ばれるラカーシュがゲームの中では一人っ子で片足が悪かったことに思い至り、今現在がその前で、妹が生存していることに思い至る。そこでルチアーナは、ラカーシュの妹、セリアの突然死を食い止めるべく、兄を巻き込んでフリテイリア家の領地で行われる誕生祭へ出向くことを画策する。ところで、現実と思われるこの物語世界で客観的に見るとルチアーナはどういう評価になるのか、兄のサファイアの言によれば、次のようになる。

「冷静に打算の目でおまえを見た場合、……家柄は侯爵家だ、悪くない。見た目も……おまえは外見だけは完成されているかな、満点だ。が、それ以外が誠に酷い。頭が悪い、魔力が低い、努力が嫌い、他人を見下す、従魔すら持つてない。言っておくが、王国広しと言えど、高位貴族で従魔を持つてないのなんてお前くらいだからな」

ひとまずルチアーナは、いろいろと自覚する以前の自分を客観視できるところまで来て、フリティリア筆頭公爵家の桁違いに立派な領地と城に到着している。そこで、ラカーシユにもセリアにも嫌われる邪魔な扱いを受けながら、とうとう双頭の蛇の魔物が出る場所に遭遇した。守るとはとても言いがたい邪魔な存在として、それでもセリアを喪い、ラカーシユの足が不自由になる出来事に間違いない遭遇した。側には兄のサファイアもいる。ゲーム設定の物語の世界とは明らかに違う展開にはなっている。ラカーシユとサファイアが魔方阵を展開し、それぞれの妹たちを逃がそうと試みているが、魔物も相当に強力なものだ。結局魔術を使い、『王国古語』の救済のフレーズに気づいたルチアーナは、風魔法を使って魔物にとどめを刺す。ホツとしたのもつかの間、ラカーシユもサファイアも助かったのだが、ルチアーナに対して驚きを隠せない。二人はルチアーナが魔術ではないものを使ったと気づき、それでもとどめを刺せたことに驚いて、珍しいものを見る目になる。少なくとも、傲慢でポンコツで邪魔な存在だと思われていた当初へのルチアーナへの認識は払拭されている。ルチアーナも驚くラカーシユの質問は、次のようなものだった。

「ダイアンサス、君は……『ユグドラシルの魔法使い』なのか……?」

兄のサファイアは、ルチアーナが唱えたつもりの風魔法が一般といかに違っていたか説明する。ルチアーナの方は追い詰められて苦し紛れにこれと思つたものを唱えたに過ぎないので、魔術発動の原理原則を無視して魔法が発動してしまったとしても言い訳以外には思いつかない状態になる。ラカーシユとサファイアは、自覚のないルチアーナが、「世界で一人だけの、運命を変えることができる者」^{ユグドラシル} 『世界樹の魔法使い』と認識する。

妹セリアを助けられ、運命が変わったことを喜ぶセリアとラカーシユに対し、無事を一緒に喜ぶのみのルチアーナを見て、「歩く彫像」であったはずのラカーシユに感情が生まれ、血が通うようになる。

このようにルチアーナは、ストーリーや気になるものを思い出しながら、その世界観を変えるべく行動する。例えば、オーブニングの画像で気になった少女を探して家に連れ帰って風呂に入れてみたら、少年だったので、ポラリスと名付けて侯爵家の庭師見習いにするなど、破滅を防止するために少しずつ善行を施していく。

また、自分の弟であるコンラートをかわいがっていると思つていたら、コンラートは実はどうに亡くなっており、何者かに魅了されているというところでウイステリア公爵家に相談する。しかし、魅了を継承していたダリルも亡くなっており、オーバンによって次の一節が紡がれる。

「世界に四星あり。そのうち二星は男性の姿をしており、一星は『北の悪しき星』、一星は『南の善き星』。残りの二星は女性の姿をしており、一星は『西の善き星』、一星は『東の悪しき星』。四星は世界樹の守り手なり」

オーバンの見立てによると、ルチアーナの眸に刻まれた魅了の印は、「三重印」で「四星」・「東」、最後の一つが「ウイステリア公爵家」の印という。つまり、ウイステリア公爵家は、ダイアンサス侯爵家のルチアーナに対して責任が発生することになる。おそらく、兄サファイアとジョシユアとの関係で『東星』との関係も発生している。物語の展開上考えられるのだが、ルチアーナは、それらに巻き込まれる形で、関わるつもりはなかった攻略対象者たちと関わることになり、原作のままの悪役令嬢ではなく、転生してストーリー展開を知っている別人格のルチアーナであるが故に、さらに、ルチアーナ自身が無自覚なので、何とも言いようがないのだが、彼女が運命を変えることのできる希有な『世界樹の魔法使い』であるが故に、高みに君臨する高位貴族たちから「溺愛」と思われるほど大切にされることになる。兄が妹をかわいがるのに乗じて、攻略対象をすべて無視し、ブラコンに走る悪役令嬢ものは、「悪役令嬢、ブラコンにジョブチェンジします」などの作品にも見ることができ、サファイアは妹をかわいがりつつも仲間内で飄々としながら、攻略対象と思われる男性たちをすべて巻き込む役割を担っている。それに対して、実は日本の普通にモテないまま何らかの理由で命を落として転生してきたルチアーナは、ストーリー用に作られた本来のルチアーナとはかけ離れた素朴さと恋愛音痴であるが故に、元々は嫌われていた悪役令嬢であったが、みなが認識を改めていくとい

う展開を辿る。

東星カドレアとサファイアとの関わりに巻き込まれる。東星の目当ても世界樹の魔法使いであるルチアーナなのだが、彼女にはその自覚がなく、あるタイミングでピースが合うとふさわしい行動と、ふと思いついた万葉集の藤の和歌を口ずさむ。藤はウイステリア家を象徴する。

「かくしてぞ 人は死ぬといふ 藤波のただ一日のみ 見し人ゆゑに」

ウイステリア家のダリルを守りたい一心で世界樹に藤波を導く形で元気を与えるが、その流れでサファイアが利き腕を失う事件に見舞われる。そこでルチアーナは、兄の腕を取り戻すために王家の聖獣を使うことを考えるが、王家もまた問題を抱えている。実は聖獣を使役できなくなっているのである。現在六巻まで出版されているが、ルチアーノを毛嫌いしていた王太子エルネストまでが、ルチアーナの魅力に気がつく展開になる。つまり、ルチアーナは攻略対象と関わらないと決意しながらもなぜか巻き込まれ、追い詰められたときに、私欲ではなく、そこで問題を抱えている他者のために命がけで処して行くことが魅力となつて、本人の思惑とは別に命がけされる。魅了の魔法に因らない魅了がルチアーナの真価であるが、本人は、無自覚で、「更生しなければならない悪役令嬢」の意識のまま、「溺愛ルート」を爆走していくのである。

四、モブ令嬢テサシア・ノーザランは理想の恋を追い求めない。

ニヒテニア王国

ナイトゲア大公家

クレイザー (悪役令嬢・王太子の婚約者)

グレイスピーク王家

シャールウ王太子

聖女

(クレイザーとの婚約破棄し、
聖女ミズキと婚約予定)

ミズキ・イシダ

ウシイクヒル伯爵家

(傘下)

ナルミニナ

レービュア・デプ
セーヴン子爵令嬢

アーベライン侯爵家 (司法官を多く輩出する家系)

「ルードヴィッヒ (ベルモンド子爵)
イエレミアス

ノーザラン男爵家 (エツゾニア、セヒーロ卿末裔)

マサキア

アヴィーナ・キン

テサシア

(たち) シャーチヤ子爵令嬢
友人・フェーヴ・リジエ

サンドライワ卿

ル子爵令嬢
タビーノ・イワテイ

インアーミューラ学長

この作品における悪役令嬢は、クレイザー大公令嬢であるが、この話の主役は、悪役令嬢ではない。いわゆるヒロイン的立ち位置に
いるのは、聖女ミズキであるが、それでも、この話の主人公ではない。
この話の主人公は、テサシアであるが、いわゆるこの手の話の
「ヒロイン」ではないというスタイルの作品である。あくまでも、

クレイザー大公令嬢が、聖女ミズキを排除するために暗殺を企てたと知った王家が、大急ぎで婚約破棄を行い、ミズキの聖女としての
手続が整うまで王家が身柄を保護し、庇護するという立場を取った
ところから来る貴族社会の政治的動揺を扱った物語である。

テサシア・ノーザランは、王宮でのデビュタントの会で決まりの
白の衣装の中で、高級でない服装しか準備できなかった令嬢へ侮り
を示した会話を耳にし、心を痛めていたところへ、ナルミニナをエ
スコートしていたルードヴィッヒが、片手で眼鏡をくいとあげて
「私はそうは思いませんね」と貧しい下位貴族のデビュタントの衣
装(生成り)を救うような発言をしたことに感銘を受け、以後、
ルードヴィッヒ様を「推し」として、ナルミニナとの組み合わせを
見守り続けていた。

ところが、ウシイクヒル伯爵家は、ナイトゲア大公家の系列のた
め、クレイザーの命を受けて、ミズキを貶めることに加担してい
た。クレイザーがミズキの暗殺も辞さないのを知った王家は、急い
でミズキを王宮で保護すると共に、そのような者を婚約者としてお
けないので、王太子は夜会でナイトゲア大公令嬢クレイザーとの婚
約破棄を発表した。ルードヴィッヒは、王太子側近として、それに
連座する形でウシイクヒル伯爵令嬢ナルミニナとの婚約を破棄し
た。波紋は広がり、学校に出てこられない者も出てくる中、テサシ
アは、仲間のノートを取ったりしながら、状況が落ちついて登校で
きるようになる日待つ。実は、貴族令嬢の刺繍のコンテストの中
で、プロに頼む高位貴族令嬢が上位に食い込んでいる中で、テサシ
アは自力で刺して賞を取っている。目利きのできるルードヴィッヒ
は、テサシアの刺繍の腕前と図案に勇気もらい、ナルミニナと婚
約破棄して一歩踏み出す勇気ももらっている。それはテサシアの知

らない出来事であったが、婚約破棄後、ひよんなきっかけから近づいてきたルードヴィツヒに対して、未練のあるナルミニナと彼女を取り巻く令嬢たちは、テサシアに不快感を示し、いやがらせをする。

ナルミニナがいる時にはまだしも、テサシアに嫌がらせをする者達が増えてくる。ルードヴィツヒが見かければ庇うこともあるが、逆効果でしかない。ある日、とうとうデブセーヴン令嬢が、テサシアをこき下ろすだけでは飽き足らず、ルードヴィツヒを貶める発言をする。テサシアは迷わず怒り、手袋を脱いで決闘を申し込む。テサシアの怒りは、自身へのさげすみへ向けてではなく、敬愛する「推し」であるルードヴィツヒを貶められたことによる怒りであり、ルードヴィツヒの名誉を守るための決闘として申し込まれる。

テサシアは、辺境の男爵家であるから、すべて自分の実力で解決し、経済力や権威には頼らない。毅然として勝算を読んで挑むテサシアに、周囲の方が動揺するが、ルードヴィツヒの方は、嫌がらせの高じた結果を憂慮しながらも、自分の名誉を守ろうとしてくれるテサシアの心ばえにひかれ、偶々借りた農学のノートを領地の代官に見せた結果も、テサシアが努力型の才女であることを示しており、ルードヴィツヒも人として優れ、自分の婚約者候補としてふさわしいと好ましく見るようになる。

決闘そのものは、学長以下を巻き込んだものになるが、テサシアは、彼女なりに計算したはったりで無事に作戦勝ちをし、死者もけが人を出さずにスマートに勝利して、デブセーヴン令嬢に謝罪させることに成功する。ここでも、決闘に負けた結果としてテサシア自身に頭を下げるデブセーヴン令嬢に謝罪相手が違うと言い、正しくベルモント卿ルードヴィツヒに謝罪をさせている。ここには、一門の上位貴族ナルミニナも登場する。ナルミニナは、デブセーヴン家

の上位家の令嬢として、感謝という名目の下、テサシアへ頭を下げる結果となる。それは、ルードヴィツヒとの道は完全に分けられていることを再確認する機会となり、ルードヴィツヒは、テサシアへの嫌がらせをしないと一門の者達に徹底できるようにであれば、ウシクヒル伯爵家との婚約時に締結した経済的な取り決めは、維持しても良いという条件を出すことになる。これは、テサシアという男爵令嬢にそれほどの価値を見出したものとして周知され、そこに気づいたナルミニナもすぐに徹底するとルードヴィツヒに返答をしている。つまり、テサシアは単なる決闘に勝つたのではなく、信念を貫き、頭脳戦で勝利することによって、ウシクヒル伯爵家の令嬢ナルミニナよりも価値ある令嬢であることを示す結果となる。

ルードヴィツヒは、エッツニアが地理的に遠くて、テサシアの両親へ婚約の打診をするには時間がかかるが、マサキアには、意向を明らかにし、また両親からテサシアについての保護監督を任されている兄のマサキアも、ルードヴィツヒが婚約候補としては上出来であることを認め、公認の仲となる。友人たちにも恵まれ、その協力の下、支度を手伝ってもらったり、服飾品を貸してもらったりして、デートにも出かけるようになる。また、『聖女と王子』の劇が行っているのも、この状況下における王家のプロバガンダであると気がつく。そういう聡いテサシアをルードヴィツヒは、国のために聖女ミズキに近づけることを考える。そこには明確なメッセージを伝えることをしてはならないが、現状の国内貴族たちの勢力図が変わり、そのことを認めたくないナイトデア大公家一門にとっては大きな不満となっているので、内乱はやむを得ない状況になりつつある。そのことをテサシアなら伝えられるだろうと一縷の望みを託して、テサシアへミズキへの面談を行ってくれるように依頼する。テ

サシアは、ルードヴィッヒの意図するところをおおよそ読み取って、上手に談笑しながら、「中立的な立場から話をするように求められている」とルードヴィッヒの意向を匂わせた上で、現状の問題点や聖女ミズキが正式な手続を経て、王太子の婚約者になるとどのような問題が発生するかについて気づかせている。ミズキは召喚された身であるが、現代日本にあった焼きプリンなどをテサシアに振る舞いつつ、テサシアの意図をこれまた上手に酌み取っている。

ルードヴィッヒにしても他の貴族たちにしても、王家がナイトゲア大公家との縁を切った手前、ルードヴィッヒのように連鎖して多くの婚約破棄が発生していた。ルードヴィッヒの場合、高位貴族ということにこだわらなければ、人としてのテサシアには、多くの価値があった。テサシアも「推し」との縁に戸惑いはあっても、国内貴族たちの勢力図があちこちで書き換えられ、戦争（内乱）の気配が色濃くなる中で、ルードヴィッヒに対する気持ちが遠くから眺めるだけで満足する「推し」から「恋愛感情」を伴うものに変化していることを認め、自分の家がアーベライン侯爵家に対してできることは何かと考えるようになる。

また、マサキアも、アーベライン侯爵家が王党派であるので、テサシアの気持ち聞いた上で、見越してアーベライン傘下に入る準備をする。テサシアは武運を祈る刺繍を準備し、マサキアは、馬をエゾニアからアーベライン領へ送るように手配し、傘下のサンドライワ卿を呼び寄せる手はずを整える。実際、サンドライワ卿と軍馬六、荷馬と乗馬用の馬総数八十頭を引き連れて、アーベライン領へ入り、テサシアもアーベライン領への滞在を申し出てルードヴィッヒを喜ばせている。

さて、悪役令嬢は大公令嬢クレイザーだが、この作品では、おおよそ戦のラスボスの存在として登場する。完璧な破滅型で、大公家の令嬢である自分より王太子にふさわしいものはないという頑なな思いに囚われている。テサシアの信念とはおおよそ異なるプライドによって固められたものと考えられる。戦の最後に王太子との話し合いを求め、どうにもならないことを悟ったところで、みなを破滅の道へ引きずり込もうとする。ルードヴィッヒも同道してそれに巻き込まれ、その刹那は、死を悟ることになるのだが、そこに圧倒的な力で救済の力を放つのが聖女ミズキとなる。ミズキは、国内に蔓延した感染症に対して実績を出し、そこで救済された者達から人気を得ていた。現代日本人であったので、この作品世界のよう

な婚姻までのシステムを知らずに王太子と出会い、恋に落ちた。クレイザーの怒りは、それに対するものであり、そこから一步も譲ることができなかつた故に、滅ぶことになる。少なくともクレイザーの思いはエゴであり、ミズキの力は他者の救済に主眼があるからである。

戦の後、それを迎えるに走るテサシアとルードヴィッヒの再会で物語は締めくくられていくが、この話は男爵令嬢の下剋上でも、聖女ものの一端を担っていても、聖女という実力派による悪役令嬢の敗北というのとも違い、悪役令嬢の大公家のプライドという頑なさが招く自爆劇のような展開となる。破滅型の悪役令嬢がまっしぐらに破滅しても、物語としては、人として優れた者が、周囲のために奔走して秩序を維持していく物語となる。この作品を悪役令嬢側から読むと、そのような反面教師的なメッセージになる。

五、悪役令嬢たちは揺るがない

エーリク・ハルヴァル王太子

○セラフィーナ・パーシヴァルタ侯爵令嬢（王太子エーリクの婚約者）

オルヴァ・マケライネン子爵家嫡男

ジェラルド・マケライネン

○サンドラ・アルデイーニ子爵令嬢

リュシアン・バルリエ（隣国公爵家三男）

○ベルナルデッタ・メリカント侯爵令嬢

サウリ・メリカント侯爵家嫡男（愛人の子）

アイニ・ミッコラ男爵令嬢（庶子／聖女見習い）

○悪役令嬢

この作品においては、三人の悪役令嬢が出てくるが、彼女たちは常識がぶれず、信念を貫いている。アイニがいわゆるヒロインで攻略対象と階級社会においては非常識な交流を続けるが、いじめることはなく、常識的な注意に留まっている。

中でも、「無理しないでください、エーリク様！ いくら王子様だからって、政略結婚で義務だけの関係なんて、お辛いに決まっています」と言い切るアイニに対し、まず、サンドラから認識の甘さや立ち居振る舞いのひどさを叱られるのだが、セラフィーナは、まず「貴女には聖女となるにはまだまだ足りない部分があるようです。そして、貴女がわたくしと殿下の婚約に関して口を出す権利などない事をしっかりと自覚なさってください」とぴしゃりと言うが、アイニには通じない。「王が決めた、未来の国王と王妃の婚約です」と応えても、アイニは「エーリク様は私の事『かわいい』って言うてくれました」と言い返す。どうやら恋愛至上主義のようだ。ところが、エーリクは「お前が新しいリボンが可愛いかと聞いてきたから、可愛いと応えたときの事か」と返している。アイニはデート

だと勘違いをしていたようだが、エーリクは「ああ、アイニの話は実に興味深かった。あまり僻地の様子を聞く機会も、使用人の生活を知る事もないからな。とても勉強になった、礼を言う」と淡々と疑念を晴らしていく。セラフィーナを誘うと物々しくなり護衛も増やさなければならぬなど、王太子として配慮すべきことは配慮している。エーリクは「自身が王太子で、既に決まった婚約者がいるから、それを知っていて懸想してくる者がいるなどと考えたこともない」ことが明らかになり、噂を故意に広めた者たちへ対処する話になっているところへアイニが言う。「そんな……愛のない結婚で、仕事ばかりして……エーリク様がかわいそうです。王としての重圧もあるのに、そんな安らぎのない生活……」とつぶやくとセラフィーナは笑いながら「貴女は本当に、わたくしとエーリク殿下を見くびってらっしゃいますね」と言った後、「わたくしとエーリク殿下は、いずれこの国を支え、守り、向上させていく使命と責務のもと、固い絆で結ばれているのです。愛などと言う薄っぺらい感情と比べてもらっては不愉快です。」と切り捨てる。

未来の王妃としての覚悟を前に応えたのは未来の国王だった。

「ああ、共にこの国を愛して育てよう」

この作品では、高位貴族の悪役令嬢と呼ばれる人の、格と次元の違う愛情と覚悟と絆を、ぽっと出の聖女見習いが勘違いした上に、逆襲される形で終わり、可愛いだけで攻略してしまう恋愛至上主義のヒロイン勝利の物語とは一線を画していますが、すがしい。

六、モブ同然の悪役令嬢は男装して攻略対象の座を狙う

バートン公爵家（人望の公爵）

兄（伯爵）

エリザベス

クリストファー（義弟）

王家

「エドワード王太子

ロベルト（チヨロベルト／エリザベスの婚約者）

ギルフォード伯爵家（宰相）

アイザック

ダグラス男爵家

リリア（聖女）

こちらも典型的な「乙女ゲーム」『Royal LOVERS』の世界に転生した悪役令嬢ものだが、発想が最もユニークである。エリザベスは、七歳のある日、大嫌いなピーマンをうっかり口にした瞬間にこの世界がゲームの世界であることと、自分がその悪役令嬢に転生してしまっていることに気づく。そこで、エリザベスは、これからヒロインに出会う十七歳へ向けて、「ノーブルでファビュラスなイケメン（女）に成長しておく必要」に目覚め、おおよそ貴族令嬢が髪を切ってしまうことなどありうべからざる時代設定の中でバツサリ金髪を切り、男装をはじめめる。剣の稽古を初め、食事も「カルシウムやタンパク質」に気を配り、「書庫に大量の女性向け恋愛小説を導入して読み漁」る毎日を送る。「ゲームの攻略対象」になるべく、剣術や身体作りにも手を抜かない。また、身長は高く育つように工夫する。

しかし、令嬢の道から大きく外れた娘を心配して父親から注意を受けるが、父親も「人望の公爵」と呼ばれるだけあって、むやみに

叱らないし、兄に至っては、「きつとリジーには、本当に必要なだと思っんです」と言って頭を下げてくれた。そういう家族に衝撃を受けながらも、イケメンとして育っていく。化粧も男装メイクを覚え、女性として化粧に目覚めたと勘違いした母親を大いにかかりさせた。トレーニングにはまり、剣は指南役との模擬戦に勝つようになっっていく。身長は一年で二十七センチは伸びて、八歳を迎え、第二王子ロベルトの誕生会に婚約者として出なければならなくなる。その時のエリザベスの心持ちは、すでに女装感覚で、男装して男のようにあるのが通常になっっていた。

次に騎士道精神に目覚め、姿勢が良くなり、立ち居振る舞いが美しくなっただ。礼儀作法でもダンスでも褒められるようになっていく。西の訓練場に師範代として指導に行けば、「隊長」と呼ばれるほど強くなっっていく。そして、そこで婚約者のロベルトと再会するが、従順な訓練生になっっているのに驚く。

東西の剣術大会では、両王子が最終対決をし、ロベルトがエドワードに勝つ。それは良いのだが、その師範がエリザベスというのが規格外に育ったことを示している。しかも、ロベルトがエリザベスに心酔しているとエドワード王太子から聞かされる。まだ、ヒロインは登場していないが、それなりに攻略できているように思われる。

エリザベスは、次に「騎士団の警邏」への同行を希望する。不測の事態に即応する訓練がしたいが故の希望である。そのうち、しげしげと王太子に呼び出されるようになる。そのつきあいのうちに軟派を目指すようになる。また、エドワードのお忍び街歩きにつきあったり、王太子の目の輝きを見て、レース編みを勧めたり、逆にできあがったレース編みを下賜されたり、ボタンをつけてやると言

われたり、材料を買い出しに行けと言われたり、不思議なつきあいが続いていく。

学園に入学すると、訓練場の生徒たちがみな入学しており、やはり隊長呼ばわりされ、隊長呼ばわりを禁止したあげくに呼ばれるようになったのは、バートン卿である。そこで、女子に軟派な態度で接する。また攻略対象が困っていると手を差し伸べて救う。そのようにしてアイザックと友人にもなる。ただ、実は攻略してしまっている。故に、ヒロインが現れても、ヒロインのリリアすらエリザベスに攻略されてしまう。

このストーリーも現在四巻目で継続中だが、エリザベスが男装麗人というか、女性受けする男性を演じてしまって男女ともから人気が高いキャラになってしまい、結末が非常に気になる存在となっている。おそらく、王太子がしたたかに残るようには思われるが、最も多様性に富み、結末が楽しみな作品である。

七、契約婚した相手が鬼宰相でしたが、この度宰相室専任補佐官に任命された地味文官（変装中）は私です

侯爵令嬢クリスティヌ・ベッソンは、国の中に蔓延する恋愛至上主義にうんざりしていた。スラン王国は、現国王が王太子の時、平民の女性と恋をして婚約者の公爵令嬢を悪役令嬢として断罪し、その平民出身の女性を王妃に戴いているが、それが故に恋愛で好きになってしまったものは仕方がないと、無責任でも通用する社会になってしまっている。クリスティヌの婚約者は八歳の頃、世話になった人の息子として伯爵家のフィリップと婚約することになったが、相性が悪く、フィリップは毎日違う女性と遊び歩いているの

で、親友からの指摘がきっかけで、この婚約者と婚約を決めた父に「二泡吹かせてやるるかしら」と一計を案ずる。クリスティヌの母も恋愛で家を出て家族に打撃を与えているので、恋愛に夢を持つどころか、浮気で家庭が崩壊する恐怖を感じながら育っている。フィリップとの相性が悪ければ、なおのこと経済的自立を考える娘に育っていった。

学院の生徒が背伸びした大人のドレスに身を包み、貴族の社交場「ナイト・ルミエール」に足を運ぶ。「男女の出会いにはここがオススメだという噂のソコ」は、おそらく恋愛至上主義故の社交場なのであろう。そこで十歳ほど上の銀髪で品の良い紳士に会う。レオンというこの男性は、クリスティヌが名乗らないのに、ベッソン家の令嬢で学院での成績が首席あることを知っていた。不慣れなシェリー酒を飲んで酔っ払いながら、クリスティヌは恋愛至上主義がまっぴらなこと、フィリップに婚約破棄される前にこちらから偽装恋愛で婚約破棄したいので、その相手を探しに来たことを話す。

「ずっとこの人と一緒にいたいって、一緒にいようっていう契約が結婚なんじゃないのですかあ？ 片方が心変わりしたからって、もう片方はただ泣き寝入りするだけなんてえー……」

クリスティヌの本音に触れてレオンは次のような提案をする。

「では——私と結婚しようか」

レオンの話は、偽装結婚の提案である。レオン、もとい、パト

リック・レオン・バステューユ公爵、宰相でもある彼は、やはりこの国の恋愛至上主義にほとんざりしていた。

クリステイヌは、レオンの提案を受け入れ、学院の卒業式直前に、父、兄と婚約者フィリップを招いて、レオンと恋仲になったから、フィリップとの婚約を取り消すとレオンにも来てもらいたい、無事に婚約解消にこぎ着ける。相手がパトリック宰相であることに驚かすはしても、誰も反対することができなかった。その後、恋愛結婚に偽装した政略結婚をしたふたりは、王都に近い領地の館に居を構え、レオンからは、東棟をまるごともらって暮らしはじめる。もともと現王の恋愛至上主義のおかげで、国が傾きつつあり、レオンは「鬼宰相パトリック」として名を馳せる一方、まったくと言っていいほど暇がなく、クリステイヌの起きているときには、まったく帰宅することができず、顔を合わせることもなかったため、クリステイヌは忘れられているものと信じていた。

クリステイヌは、文官としてバリバリ働いてみたかったので、父親に内緒でミドルネームのシャルロットと母方の苗字を使って、文官の試験を受け、見事合格していた。仕事名「シャーロット・ミユラー」として、存分に働き、公爵家の使用人のお世話が優秀なのに任せて、たびたび入浴やマッサージの段階から寝落ちしていた。そんなシャーロットの様子をレオンは時折見に帰ってきて、寝ているシャーロットの頭を撫でるだけで去って行く。使用人たちも激務に呆れながら、それでも、レオンが結婚を決意したあたりから少しずつ楽しそうに生気が宿るのに期待して、万全のフォローを敷いた。シャーロットはそのうち、国の事業であるにもかかわらず、恋愛が原因での契約不履行案件は、その後信用を失って契約打ち切りになっている事などに気づき、貿易額の帳簿の偽装にも気がつい

てしまった。そうこうするうちに、財務省内でランクアップし、激務で有名な宰相補佐室へ異動となった。レオンたちよりも年上の女性文官アイリーンは、シャーロットがパトリック宰相の妻だと知っていた。宰相室に書類を取りに行ったシャーロットの前で過労と心許した妻の前だったためか、レオンは寝落ちしてしまう。その報告を受けたアイリーンは、宰相専任補佐官にシャーロットを推薦する。結婚してからおよそ四年が経過していた。

帰宅してクリステイヌとの距離を縮めることのできないレオンは、職場でシャーロットとしての妻と距離を詰めようとする。恋愛忌避感の強いクリステイヌだが、価値観も同じで誠実で潔癖な性格も気に入る、優秀で、他部署との連携業務にも気が回る姿を評価し、応援する姿勢を示す。また、他部署からのいわれない見下した態度にもレオンはしつかり見守って庇い、シャーロットの気持ちを守り救う形で支えていく。貴族の情報は細かなことまですべて頭に入っているレオンは、場合によっては、報復をさりげなく企む策士でもある。シャーロットは、レオンと同じ志であることを信じ、場合によっては政治的に恐ろしいところに首を突っ込んでいくと知りつつも、レオンを信じて気づいたことを打ち明け、受け入れられて心底ホッと安堵する。実はレオンたちは、王太子クロードと共に、現国王下で行われている恋愛至上主義による国益の損失をなんとか食い止めようとしていた。

また、クリステイヌが「頬へのキスなど挨拶」と強気に突っ張ったことが徒となって、部屋の出入りにレオンとの抱擁が加えられた。恥じらいながら追い詰められるシャーロットに癒やされながら、レオンはシャーロットとの距離を詰めつつ、聖道具を用いた業務効率化などの改革を加えていく。シャーロットも自分とレオンの

関係がまるで親子と変わらないのではと疑念を持ったりしながら、逆に自分から抱きついていってレオンを驚かせている。十歳の年の差と仕事における優秀さでまだまだ子供だと思ふシャーロットの方は、恋愛忌避に伴う恋愛音痴も伴って、優秀であるにもかかわらず、時折、あらぬ方へ関係性の把握を間違える。その姿が、初めで可愛くもある。一方、安易な恋愛至上主義は人の心を傷つけ、無責任なものであるとも言える。

また、業務改善の過程で、王家の劇場に前宰相時代の聖道具を使った細工があることが発覚し、それが国際条約の禁止事項にも触れるものであることが分かる。そこから現国王が黒の王子と呼ばれていた時代に引き起こした有名な婚約破棄事件にすべての始まりがあることに思い至る。

ここでの悪役令嬢はフォンタナ前宰相の娘で現国王の王太子時代の婚約者であったジュリエッタである。彼女は、決して現王妃に当たる平民女性を虐げたことはなく、常識的な忠告や進言しかしていないのに、汚名を着せられ、婚約破棄され、逃げるように他国に嫁いだという。そして国内では、王太子と平民女性の純愛としてもてはやされ、それが、この国の今の形になったという。シャーロットは、フォンタナ前宰相は、娘への報復として、現国王が後世に愚王として名を残すように、この国にわかりにくく恋愛至上主義の軽い洗脳装置を置いて、国力衰退を狙ったのではないかと推測し、フォンタナ侯爵家の財政状況を調べ、推論を現王太子が主導する改革派の集まりで述べる。フォンタナ侯爵家の財産は密かに聖道具に使われたと思われるほどに傾いていることを突き止める。

つまり、本当の悪女は、元平民であった現王妃である。悪役令嬢は割りの悪い「悪」の役を振られた被害者となる。現に国王夫妻は

現在不仲でお互いに恋人をとつかえひつかえし、一方で純愛賛美の劇をプロパガンダし続けているという状況にある。

レオンたちは、シャーロットやアイリーンなどの優秀な女性たちを巻き込むことなく、王太子主導で密かなクーデターを起こす。フォンタナ前宰相のからくりがシャーロットによって解明され、劇の上演禁止にまでこぎ着けた上での行動である。国際条約違反をした国王を戴いておく訳にもいかず、政権を王太子が譲位として受け取った方が穏便に国が回り、国益にも適うからである。

恋愛至上主義から責務はいずれにおいても果たす路線へ変更し、聖道具を業務軽減のための伝達ツールとして開発し、組織改編をして人員を補充したレオンたちは、ようやく異常な激務から解放されはじめる。そういう中で、再びレオンはクリスティーヌにドレスを贈ってデートに誘い、「私と結婚しようか」と問う。偽装結婚ではなく、本当の一生一緒にいたいと思う責務を伴った結婚であると説明する。とつくに適わない恋愛感情をレオンに抱いていると自覚しているクリスティーヌは、「一生一緒にいてくれるのはうれしいだけ」と思っ「もちろんです」と賛成するのだが、レオンは、自分の愛情が正しく伝わってない、この点において鈍い自分の妻にはつきり「同じ部屋で一緒に寝ようと言ってる」と告げている。赤面して返事に窮するクリスティーヌだが、無事に思いを受け入れて、本物の結婚にたどり着く。

悪役令嬢の物語が改めて恋愛観や結婚観を突き詰めるスケールの大きな物語を形成している例である。

八、その他の作品とまとめ

他に、36「破局予定の悪女のはずが、冷徹公爵様が別れてくれません！」でも、「悪役令嬢は溺愛ルートに入りました!？」と同様に、転生してきた故に物語の知識を活かして他者のために奮戦するヒロインが描かれている。本人は自分が破滅したくないのと相手に不幸になってほしくないという前世の知識で行動しているためにそれが相手にどのような影響を与えるか理解しないまま動くので、妙な失踪事件を起こしたりもしている。また、37「私の上に浮かぶ『悪役令嬢（破滅する）』って何でしょうか？」特殊能力でゲーム機の吹き出しのように自分や他人の吹き出しが見えてしまい「悪役令嬢」とか「破滅する」とかいう文字が出ると躍起になって、その運命から逃れようとする悪役令嬢の物語が出ている。これも分かりやすく、自分の運命と対峙する物語になっているが、現在二巻目までまだ続きそうである。

このようにファンタジーであつても現代社会が抱えている問題を捉えている作品が、今日のライトノベルを支えていると考えられる。現代性と普遍的な課題や普遍的なモチーフで書かれる大量生産される作品群の中から良さそうなものを抽出して読んでいると、読者が求めているものは、振り幅はあるにせよ、案外常識的で堅実な幸福だと気づかされる。それにしても、いじめや虐待を超えた思いやりなど、普遍的に人々が求めるものは、時代を超えて再生され続けるものだと考えさせられる。

ライトノベルはゲーム世代に読まれているとも言えるが、ゲームの攻略本や小説のシナリオからいかに逃れて断罪されないようにするかが、「悪役令嬢」ものの主眼であった。しかし、「公爵令嬢は我

が道を場当たり的に行く」のように、もはや、ゲームではない現実社会では、攻略本は役に立たない。マニュアルや攻略本がなければ動けない現代の若者に対し、もはや、それらを頼りながら一喜一憂するより、現実を見きわめながら生きることの重要性を説き始めていると言いうことができよう。

付記 引用した作品は、Kindle版のものを底本としている。

注1 拙稿「ライトノベルにおける物語の技法(一)——悪役令嬢の現実——」『歌子』第29号p7-28

注2 拙稿「ライトノベルにおける物語の技法(二)——悪役令嬢の対するもの——」『歌子』第31号p

注3 Amazonのレビューで星4つ以上のものから、筆者があらすじ等吟味の上、すべて読了して作成。